ヨーロッパ日本語学習者のライティング（エッセイ）分析：

総合的評価とマルチプルトレイト評価結果を参照して

田中　真理（名古屋外国語大学）、阿部　新（東京外国語大学）
影山　陽子（日本女子体育大学）、佐々木　藍子（国立国語研究所）
坪根　由香里（大阪観光大学）

要旨

本稿は、ヨーロッパの今後のライティング教育の方向付けへの貢献を目的として、ヨーロッパの日本語学習者のエッセイ分析を行ったパネルの報告である。「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」（I-JAS）のエッセイ 611 編に対して 1～6 レベルの総合的評価を行った。さらに、そのうちの、ヨーロッパの学習者のデータ 193 編の中で、評価の一致率が高かった 54 編に対してマルチプルトレイト評価（「目的・内容」「構成・結束性」「日本語」の 3 つのトレイト別評価）を行った。パネルでは、このトレイト別の観点から、まず 193 編のデータの「日本語」の言語特徴の量的分析、次に 54 編のデータの「目的・内容」、「構成・結束性」面からの質的分析の結果を報告した。最後に、ヨーロッパの学習者の中で最も評価点の高かったエッセイを示し、good writing の要素について確認した。

【キーワード】　ヨーロッパの日本語学習者、I-JAS、ライティング、総合的評価、マルチプルトレイト評価

Keywords:　European Learners of Japanese, I-JAS, Writing, Holistic scoring, Multiple-trait scoring

1　はじめに

1.1　本研究の背景と目的

本稿[1]では、good writing 研究の一環として、これまで分析対象として取り上げられることの少なかったヨーロッパの学習者のライティング（エッセイ）を対象に分析を行った結果について報告する。ヨーロッパの学習者を十把一絡げに論ずることは難しいが、ヨーロッパの今後のライティング教育の方向付けに貢献することを目指している。

本研究に先駆けて行われた田中・久保田（2014，2016）、Tanaka & Kubota（2015）、田中（2016a）では、母語のライティングの影響を見るため、日本でライティング教育を受けていない中国語話者、英語話者（米国）、および日本語母語話者の日本語のエッセイの「構成」について調べたが、中国語話者と日本語話者のエッセイの構成の傾向には似ている点とそうでない点があった。また、英語話者のエッセイには母語（英語）でのエッセイ・ライティングの影響が認められるものもあった。

田中（2016b）では、ヨーロッパの日本語学習者のエッセイの「読み手意識」（メタ言語、呼びかけ、終助詞、修辞疑問、マクロ構成の型）について考察した。そうしたところ、上述の中国語話者、英語話者、日本語母語話者とは異なる傾向が認められた。

そこで、今回ヨーロッパの学習者のエッセイの特徴をより深く探るべく、田中（2016b）

で使用した「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」（I-JAS）（迫田他，2016）のヨーロッパの学習者のエッセイを対象に、6 レベルの総合的評価と、3 つのトレイト（「目的・内容」「構成・結束性」「日本語」）から成るマルチプルトレイト評価（それぞれ 6 レベル）を行った。本稿では、この 3 つのトレイトの観点から分析した結果を報告する。

（文責：田中真理）

1.2　研究方法

評価対象としたデータは、I-JAS の中のエッセイデータである[2]。このエッセイは「ファーストフードと家庭料理」というテーマで、それぞれの良い点と悪い点を説明し、食生活についての意見を 600 字程度で書いたものである。辞書やインターネットの使用は許可されているが、日本人や教師などには助言を求めないようにという条件の基で書かれている。

評価方法は、まず、I-JAS のエッセイ 611 編に対して、6 名の評価者をランダムに 3 名ずつ組み合わせて、総合的評価（1～6 レベル）を行った[3]。評価点は基本的に中央値で決定し、2 レベル以上の差があるときには評価者間ミーティングを行い決定した。611 編のエッセイのうち、ヨーロッパの学習者のデータは 193 編であった。この学習者の母語別の内訳は、ドイツ語 32 名、スペイン語 48 名、フランス語 12 名、トルコ語 25 名、ハンガリー語 37 名、ロシア語 39 名である。日本語能力レベルは J-CAT で 59 点から 304 点、SPOT で 30 点から 86 点の学習者である。次に、総合的評価において 3 名の評価者の評価の一致率が高かった 54 編に対して、評価者 5 名でマルチプルトレイト評価（「目的・内容」「構成・結束性」「日本語」）を行った。評価には、マルチプルトレイト評価基準を基にトレイト別に作成したそれぞれのフローチャート（FC）を使用した。この 54 編の学習者の母語別の内訳はドイツ語 8 名、スペイン語 13 名、フランス語 5 名、トルコ語 8 名、ハンガリー語 9 名、ロシア語母語話者 11 名である。これらの学習者の日本語能力レベルは、J-CAT で 81 点から 301 点、SPOT で 37 点から 80 点である。

本稿では、マルチプルトレイト評価のトレイト別に、「日本語」では 193 編のエッセイの言語特徴を量的に分析し、「目的・内容」および「構成・結束性」では、54 編のエッセイについて、質的に分析する。

（文責：佐々木藍子）

2　日本語

パート 1 では、I-JAS のヨーロッパの日本語学習者によるエッセイ 193 編を、総合的評価によって上位群 49 名（レベル 5-4）、中位群 86 名（レベル 3）、下位群 58 名（レベル 2-1）に分け、日本語の特徴を成績群別に比較し、分析した結果を報告する。具体的には、まず、各群の言語特徴量の平均値から有意差を検定して、群間で有意差のある言語特徴を特定し（2.1）、各群のライティングにおけるそれらの違いについて考察する（2.2）。

2.1　検討する言語特徴量

まず、以下の 35 の言語特徴量[4]の群間の有意差を一元配置分散分析（繰り返しなし）により検討した。その結果、$p < .01$ かつ、効果量 $\eta^2 > 0.14$ の言語特徴量を選び出した（竹内・水本 2014 : 50-52, 355）。選んだのは, 以下のリストのうちゴシック体で表したものである。

総文字数・総段落数・総文数・第 1 段落の文字数・第 1 段落の文数・第 1 段落の形態素数・最終段落の文字数・最終段落の文数・最終段落の形態素数・感動詞・形状詞・形容詞・**助詞**・助動詞・接続詞・代名詞・**動詞**・副詞・固有名詞・**普通名詞**・連体詞・平均語数・総形態素数・**異なり形態素数**・**内容語**・**名詞**・その他の品詞・ひらがな・カタカナ・**漢字**・和語・**漢語**・外来語・混種語・リーダビリティレベル

上記のような群間で有意差のある言語特徴量の特定を経て、以下、異なり形態素数、総形態素数、総文字数、総文数、助詞、動詞といった言語特徴から、エッセイの量的な違い、終助詞による書き言葉と話し言葉の違い、文末表現の文体の違いの 3 点について述べる。

2.2　成績群別の言語特徴

2.2.1　エッセイの量的な違い

まず、量的な違いを検討する。各群の総文字数、総文数、異なり形態素数、総形態素数の平均値の差について、Mann-Whitney の U 検定による多重比較を行った。

総文字数と総文数の結果（表 1）を見ると、総文字数は上位群と下位群、上位群と中位群の間で有意差が見られたが、総文数はどの群間にも有意差が見られなかった。ここから、上位群はエッセイ全体が長く、一文も長くなっていると考えられる。

表 1. 群別の総文字数・総文数の平均値

	総文字数	総文数
上位群（49 人）	646.20	17.76
中位群（86 人）	587.21	19.03
下位群（58 人）	536.81	18.62
U 検定による有意差検定の *p* 値 （有意水準* ＝.05/3=.0166…） （有意水準** ＝.01/3=.0033…）	下位-中位　.0503 下位-上位　0 ** 中位-上位　.0001 **	下位-中位　.55 下位-上位　.34 中位-上位　.04

また、異なり形態素数と総形態素数の結果（表 2）を見ると、異なり形態素数も総形態素数も、上位群と中位群・下位群との間で有意差があり、評価が上がるにつれて異なり形態素数も総形態素数も多くなることが分かった。つまり、上位群では語彙のバリエーションが下位群に比べ、多いことが明らかとなった。

表 2. 群別の異なり形態素数・総形態素数の平均値

	異なり形態素数	総形態素数
上位群（49 人）	139.84	380.88
中位群（86 人）	124.34	342.78
下位群（58 人）	113.88	308.72
U 検定による有意差検定の *p* 値 （有意水準* ＝.05/3=.0166…） （有意水準** ＝.01/3=.0033…）	下位-中位　.0149 * 下位-上位　0 ** 中位-上位　0 **	下位-中位　.02 下位-上位　0 ** 中位-上位　.0001 **

2.2.2　助詞による書き言葉と話し言葉の違い

次に、学習者のエッセイを形態素解析にかけ、群別に助詞の使用数を算出した。その結果、群間で使用数に違いがあることが分かった。

2.2.2.1　終助詞「ね」「よ」「か」

まず、終助詞の「ね」「よ」「か」について検討した（表 3）。上位群では下位群に比べ、「ね」「よ」などの終助詞の使用が少なく、話し言葉的な助詞の使用が減ることが分かった。また、上位群・中位群では下位群に比べ、終助詞「か」の使用が目立った。この「か」は、中位群・下位群では疑問文で使用され、上位群では修辞疑問で使われる例が目立つ。これは田中（2016b）と同様の結果である。つまり、上位群では「か」による書き言葉表現を使用していることも分かった。

表 3. 終助詞「ね」「よ」「か」の群別全使用数と各群一人当たり使用数

	「ね」		「よ」		「か」	
	全使用数	一人当たり使用数	全使用数	一人当たり使用数	全使用数	一人当たり使用数
上位群（49 人）	0	0.00	2	0.04	57	1.16
中位群（86 人）	16	0.19	10	0.12	109	1.27
下位群（58 人）	12	0.21	15	0.26	46	0.79

＜か＞の例

- ファーストフードと家庭料理はどちらがいいです**か**。（下位群：SES24）
- しかし、いくら手間がかかっても、健康的な食べ物は一番ではないだろう**か**。（上位群：HHG51）

2.2.2.2　準体助詞「ん」「の」

次に、準体助詞の「ん」「の」について検討した（表 4）。話し言葉的な「ん」は上位群では使用が見られず、中位群で多く見られたものの、下位群では使用がわずかしか見られなかった。これは下位群ではこのような準体助詞を使用できないためだろうと推測される。一方で、書き言葉にふさわしい「の」は上位群で使用が多く、下位群では少ない。ここでも上位群が書き言葉にふさわしい助詞を使用し、下位群では使用できない様子が見られた。

表 4. 準体助詞「ん」「の」の群別全使用数と各群一人当たり使用数

	「ん」		「の」	
	全使用数	一人当たり使用数	全使用数	一人当たり使用数
上位群（49 人）	0	0.00	187	3.82
中位群（86 人）	34	0.59	241	2.80
下位群（58 人）	8	0.14	112	1.93

＜ん＞の例

- ビタミンが少ないから、体にも悪い**ん**です。（下位群：HHG31）

＜の＞の例

- 食生活は現代人のライフスタイルを反映する**の**である。（上位群：HHG26）

2.2.2.3　接続助詞「けど」「し」「から」

また、話し言葉でよく聞かれる接続助詞「けど」「し」「から」について検討した（表 5）。ここでも、「けど」「し」は上位群で少なく、中位群と下位群では使用が多く見られた。また、「から」も、上位群と中位群では少なく、下位群では多く見られた。エッセイの評価が低い群になるほど、話し言葉でよく聞かれる接続助詞が使用されることが分かった。

表 5. 接続助詞「けど」「し」「から」の群別全使用数と各群一人当たり使用数

	「けど」		「し」		「から」	
	全使用数	一人当たり使用数	全使用数	一人当たり使用数	全使用数	一人当たり使用数
上位群（49 人）	8	0.16	21	0.43	72	1.47
中位群（86 人）	29	0.34	63	0.73	123	1.43
下位群（58 人）	18	0.31	37	0.64	100	1.72

＜けど＞の例

- そして家の料理はちょっと高いです**けど**、とても元気はいいです。（下位群：FFR54）
- ファスト・フードは便利だ**けど**、バーガーの内容物は牛肉だけですか。（中位群：GAT30）
- …大丈夫だと思う**けど**、健康に気をつけたほうがいいと思う。（上位群：FFR10）

＜し＞の例

- ファーストフードは体によくない**し**、カロリーの高い。（下位群：TTR45）
- 自分の家で料理をすると、いい材料を選択できる**し**、静かな周りでゆっくり食べられます。（中位群：GAT26）
- ファーストフードは一番便利だ**し**、あまり高くない。（上位群：FFR10）

＜から＞の例

- 人は忙しい**から**そんなによく食事します。（下位群：RRS03）
- 速く食べることは胃に悪い**から**、たぶん調子は悪くなる。（中位群：GAT19）
- だいたい人は料理したくない**から**、インスタント食品を買う人が多くなってきた。（上位群：FFR10）

2.2.2.4　接続助詞「と」「が」

さらに、「と」「が」について検討した（表 6）。ここでは、「と」は上位群と中位群で使用が多く、「が」は上位群で使用が多いという結果となった。エッセイの評価が低い群になるほど、書き言葉でよく見られる接続助詞の使用が少ないことが分かった。

表 6. 接続助詞「と」「が」の群別全使用数と各群一人当たり使用数

	「と」		「が」	
	全使用数	一人当たり使用数	全使用数	一人当たり使用数
上位群（49 人）	40	0.82	64	1.30
中位群（86 人）	60	0.70	79	0.92
下位群（58 人）	23	0.40	63	1.09

＜と＞の例

- 一方で日本のファスト・フードは私の国に比べる**と**全然違います。（下位群：GAT25）
- 一方で医学者による**と**、ファースト・フードは体によくないそうです。（中位群：GAT09）
- 健康に気を配らない**と**いけません。（上位群：GAT12）

＜が＞の例

- ファーストフードがとてもべんりな食べ物です**が**、あまりよくありません。（下位群：RRS01）
- これは私の個人的な考えです**が**、 …。（中位群：GAT09）
- 日常生活ではファーストフード店も必要です**が**、人々はもっと自家製料理を食べたほうがいいかもしれません。（上位群：HHG25）

2.2.3　文末表現の文体の違い

最後に、文末表現の文体について検討した。

まず、文末の「です」「ます」の使用数を群別に算出したところ、上位群では「です」「ます」が少ないことが分かった（表 7）。ここから、上位群では普通体でエッセイを書く傾向が明らかとなり、書き言葉らしい文末表現を選んでいることが分かった。

表 7. 文末の「です」・文末の「ます」の群別全使用数と各群一人当たり使用数

	文末の「です」		文末の「ます」	
	全使用数	一人当たり使用数	全使用数	一人当たり使用数
上位群（49 人）	84	1.71	181	3.69
中位群（86 人）	346	4.02	468	5.44
下位群（58 人）	251	4.33	356	6.14

次に、形態素解析によって得られた形態論情報から、活用形を析出し、活用形別の使用数を算出し、文末に出現する数を分析したところ、上位群ではそれぞれの終止形で文を終えることが多いことが分かった（表 8）。この結果からも、上位群では普通体でエッセイを書く傾向が明らかとなり、書き言葉らしい文末表現を選んでいることが分かる。

表 8. 文末の動詞終止形・形容詞終止形・助動詞「だ」の群別全使用数と各群一人当たり使用数

	動詞終止形 ＋ 。		形容詞終止形 ＋ 。		助動詞「だ」 ＋ 。	
	全使用数	一人当たり使用数	全使用数	一人当たり使用数	全使用数	一人当たり使用数
上位群（49 人）	227	4.63	51	1.04	58	1.18
中位群（86 人）	245	2.85	52	0.60	32	0.38
下位群（58 人）	100	1.72	11	0.19	10	0.17

2.3　まとめ

以上の分析から以下の 3 点が分かった。まず、各群の総文字数、総文数、異なり形態素数、総形態素数の差を検討した結果、上位群はエッセイ全体が長く、一文も長くなってお

り、語彙のバリエーションが下位群に比べ、多いことが明らかとなった。また、助詞の使用数の違いから、レベルが上がるにつれて、書き言葉に適した助詞の運用（終助詞「ね」「よ」の不使用・準体助詞「の」使用と「ん」の不使用・接続助詞「と」「が」の使用と「けど」「し」「から」の使用の少なさ）をしていることが確認された。特に上位群では修辞疑問の終助詞「か」を使っていることも分かった。レベルが上がるに従い、話し言葉と書き言葉の区別をつけられるようになっていることが推測される。さらに、文末表現の違いから、下位群では丁寧体「です」「ます」の使用が多く、上位群では文末を動詞・形容詞の終止形や助動詞「だ」で終わらせるような普通体の使用が多いということが分かった。

ただし、今回の分析は言語特徴の使用傾向を明らかにしたに過ぎない。より詳細な用法の分析が必要となる。そういった結果をライティング教育に応用していく方策も検討していく必要があるが、これらは今後の課題としておきたい。

（文責：阿部新・佐々木藍子）

3　目的・内容

パート 2 では、「目的・内容」のマルチプルトレイト評価（MT 評価）と総合的評価（H 評価）の比較を行い、両評価結果において 2 レベル（L）以上の差があるエッセイを取り上げ検討する。

ライティングの評価観点として不可欠でありながらも、客観的な基準が示しにくいのが「目的・内容」であり、「目的・内容」の評価に焦点を当てた研究はあまり見られない。今回、MT 評価を 3 つのトレイト別で行ったことから、「目的・内容」を独立させた MT 評価と H 評価との比較をすることで、ヨーロッパ日本語学習者のエッセイにおける「目的・内容」の特徴を明らかにしたい。

3.1　「目的・内容」の MT 評価の評価基準

「目的・内容」の MT 評価として使用した FC の観点は、L1～L6 の順に「メインアイデア（比較と意見）の有無」「メインアイデアへのサポートの有無」「メインアイデアの一貫性と妥当性の有無」「社会的な視点や客観性の有無」「オリジナリティの有無」である。

3.2　「目的・内容」の MT 評価結果と H 評価結果の比較

まず、対象の 54 編を評価したところ、L1 が 5 編、L2 が 20 編、L3 が 12 編、L4 が 13 編、L5 が 4 編となり、L6 に該当するものはなかった。さらに、「目的・内容」の MT 評価と H 評価が一致しているもの（MT＝H）、「目的・内容」の MT 評価が H 評価より低いもの（MT＜H）、「目的・内容」の MT 評価が H 評価より高いもの（MT＞H）をカウントした。その結果を表 9 に示す。

表9．MT評価結果とH評価結果の比較

	L1	L2	L3	L4	L5	計
MT＝H	3（60%）	8（40%）	10（83.4%）	2（15.3%）	2（50%）	25（46.3%）
MT＜H	2（40%）	8（40%）	1（8.3%）	1（7.7%）	2（50%）	14（26%）
MT＞H	0（0%）	4（20%）	1（8.3%）	10（77%）	0（0%）	15（27.7%）
計	5	20	12	13	4	54

全体での一致率（MT＝H）は46.3%であった。L3 ではMT＝H が 83.4%と高かった。L2 では、MT＝H と MT＜H が各 40%、MT＞H が 20%と分かれた。L4 では、MT＞H が 77%と多数を占めたが、L5 ではMT＞H のものは見られず、MT＝T と MT＜H が半々であった。この結果から、最初の L1 から L2 の分岐で「メインアイデア（比較と意見）の有無」が原因で評価が分かれ、次に L2 から L3 の分岐観点である「メインアイデアへのサポートの有無」においても、メインアイデアとそのサポートとの関連性で評価が分かれることが明らかになった。それらが原因で、L2 レベルでは H 評価に対して多様な MT 評価が表れている。一方、L2 から L3 への分岐点である「メインアイデアへのサポートの有無」をクリアしたエッセイは、L3 から L4 への分岐において、MT＞H と評価される率が高いことから、「メインアイデアへの一貫性・妥当性」が備わっている様子が窺えた。

3.3　「目的・内容」の MT 評価結果と H 評価結果の差が大きいエッセイ

次に、MT 評価と H 評価のレベル差の大きいエッセイを取り上げ検討する。MT＞H は 2 レベル差のものが 1 編（FFR54）、MT＜H では、3 レベル差 1 編（HHG46）、2 レベル差 2 編（RRS48、GAT30）であった。各々の H 評価と 3 トレイトの MT 評価結果、および各 MT 評価の理由を示したものが表 10 である。

表10. 4編のエッセイのH評価と3トレイトのMT評価およびその理由

	H	MT目的・内容	MT構成・結束性	MT日本語
FFR54	2	4	3	3
理由		ファーストフードと家庭料理の利点と欠点を示すのに、具体的な事例が述べられており内容が豊か。最後の一文を意見ととらえた。	構成に大きな問題はない。	日本語力に難あり。話し言葉的でレジスターにそぐわない。
HHG46	5	2	4	6
理由		結論部分で新出概念が登場し、第2段落が結論をサポートする根拠として機能していない。	メタ言語の使用が少なく、段落の役割が分かりにくい。	日本語力は高い。
RRS48	4	2	4	3
理由		「あなたは？」という問いかけのまま結論に至っており、本人の意見がよく分からない。	構成はよい。	日本語力は普通。普通体と丁寧体の混合使用が見られる。
GAT30	3	1	3	3
理由		課題にこたえていない。ファーストフードは不健康という話が契機となり現代社会のストレスやコミュニケーションの能力の話になってしまっている。	マクロ構成はあるものの、話がずれてしまっている。	語彙力はあるが、話し言葉的でレジスターにそぐわない。

MT＞H で 2 レベル差があった FFR54 は、「目的・内容」の MT 評価で L4 という高評価を得て「構成」にも大きな問題はなかったものの、「日本語」の評価が原因で、H 評価で L2 となっている。これは、課題に対して主張したい「内容」が書かれ、それを伝える「構

成」についても理解して書けているが、「日本語」の力が不足しているため、それらが上手く表現できないという日本語学習者によく見られる現象である。

一方、MT＜H の HHG46、RRS48、GAT30 は、「日本語」や「構成・結束性」に比べ「目的・内容」が劣ると評価されている。

例えば、以下に示す GAT30 は、非常に豊かな「内容」および「本人としての意見」はあるものの、課題への応答に問題を抱えたエッセイである。(エッセイ番号の右側の数字は「H 評価（MT 評価　目的・内容、構成・結束性、日本語）の評価レベル」を示す。また、課題とエッセイ中のゴシック体への変換および①②等のナンバリングは分析者による。)

目的・内容が L1 のエッセイ（全文）

【課題】
私たちは日常生活で、ファースト・フードと家庭でゆっくり味わう手作りの料理を食べています。**ファースト・フードと家庭料理を比較し、それぞれの良い点や悪い点などを説明**して、**「食生活」についての意見**を 600 字程度で書いてください。

【GAT30：3（1、3、3）】
皆はいつも①**時間がないから、早く食べるのことは普通になってきたと思います。そうしたら、世界中にファスト・フードが人気になりました。**ファスト・フードは便利だけど、バーガーの内容物は牛肉だけですか。さらに、②**牛はいい草を食べたの？牛は元気でしょうか。そのこと皆、知らないね。**
皆は、仕事で忙しいので、ラーメンなど早く食べた後で、会社に戻ります。仕事が終わって、電車で帰宅しています。さらに、家でテレビを見ながら、早く作ったインスタントラーメンを食べますね。もちろん、奇跡でも起こらない限り、体が悪くなったと思います。だから、③**ストレスによる潰瘍がある人が増えてきたと思います。他に過労死のこともあります。現代の世界はもストレスの世界だと思います。今、人間の体は大切じゃなくて、仕事とお金がほうが大切になりました。**
最近、オーストリアでオーガニック食べ物が人気になりました。肥料を使わなくて、健康的な食べ物が増えてきたと思います。新鮮な食べ物を買って、家で友達と一緒に料理を作るのはとても楽しいです。さらに、新しい友達に会ったり、話したり、音楽を聞いたりするのはいいことですね。だから、④**愛想の良くて、体もよくなるので、オーガニック・フードやスロー・フードを食べるのはいい点です。**其の上、⑤**現代の世界は愛想のよくなってきました。皆はフェイスブックとか、ツイッターとか、ブログとかスマホとかを使うので、コミュニケーション能力が忘れてしまったと思います。**

具体的に見ていくと、ゴシック体で示したように①「**時間がないから～世界中にファースト・フードが人気になりました**」④「**愛想の良くて、体もよくなるので、オーガニック・フードやスロー・フードを食べるのはいい点です**」等と課題に関連した記述がされてはいるものの、それ以外に、②「**牛はいい草を食べたの？牛は元気でしょうか**」③「**ストレスによる潰瘍がある人が増えてきたと思います。他に過労死のこともあります～仕事とお金がほうが大切になりました。**」⑤「**現代の世界は愛想のよくなってきました。皆はフェイスブックとか、ツイッターとか、ブログとかスマホとかを使うので、コミュニケーション能力が忘れてしまったと思います**」等と「食生活」についての意見から脱線した「本人なりの（現代社会への）意見」のほうが強く記述されている。そのため、FC の最初の分岐点

（L1→L2）である「メインアイデア（比較と意見）の有無」で「無」と判断され、「目的・内容」MT 評価において最低レベルの L1 と評価されてしまったのである。

次に示す HHG46 は「日本語」能力は申し分ない（L6）ものの、ゴシック体部分①に見られるように「結論部分で新出概念が登場し、第 2 段落が結論をサポートする根拠として機能していない」ため、「メインアイデアへのサポートの有無」が問題となり、「目的・内容」MT 評価では L2 にとどまっている。

目的・内容が L2 のエッセイ（一部分）

【HHG46：5（2、4、6）】
＊3 段落構成（序論・本論・結論）のうちの第 3 段落（結論）部分のみを表示
…前略
現代のペースに合わせて食文化も変わり、ファーストフードという食事スタイルが世界的に広がっている。同時にファーストフードと健康問題の因果関係も指摘され、ファーストフードに対する意見は様々であろう。このような今日であるからこそ、①**ファーストフードと手作り料理の競争の勝利者は結局「ファースト手作り料理」**ではないかと思われる。

最後に、RRS48 は、「メインアイデア（比較と意見）の有無」のうち、「比較」は認められたものの、「意見」に関しては、序論においても結論においても①②「**あなたは／が**」という視点で記述されていたため、執筆者の「意見」が分かりにくいと判断され、L2 という評価となったエッセイである。

目的・内容が L2 のエッセイ（一部分）

【RRS48：4（2、4、3）】
＊5 段落構成（序論・本論３段落・結論）のうちの第 1 段落（序論）と第 5 段落（結論）を表示
①**あなたはファーストフードと家の料理をどちらがよく食べますか**、どちらがもっと好きなのか、という質問があります。
…中略…
家の料理やファーストフードをどちらをよく食べるのを②**あなたが選択しなければなりません**。ですから、食べる前に料理のプラスやマイナスのことをよく考えて下さい。

GAT30 や HHG46 のような「本人なりの意見」を偏重したエッセイはアジア学習者のエッセイにはあまり見られない。田中（2016a）が指摘するように、大規模試験への関心が高いアジアの学習者には、文章の「型」を意識し、「意見」を表明することよりも「課題」への応答を無難にまとめる傾向が見られるためだろう。それに対して、ヨーロッパの学習者のエッセイには、自身の「意見」を強く主張する姿勢や、RRS48 のように「読み手」に対して呼びかけ、議論を促したり諭したりするような姿勢が見られる（田中、2016b）。そのような傾向は、2.2 で示した「メインアイデア（比較と意見）の有無」「メインアイデアへのサポートの有無」という分岐点で、「目的・内容」の MT 評価のばらつきが見られたこととともなんらかの関係があるのではないか。つまり、このような「意見」を軸としたライティングは、ヨーロッパ日本語学習者の「目的・内容」における特徴といえるだろう。

（文責：影山陽子）

4　構成・結束性

パート 3 では、MT 評価の「構成・結束性」の評価について分析した結果を報告する。「構成・結束性」で使用した FC の評価ポイントは、下から順に「構成意識」「パラグラフ意識」「マクロ構成（序論・本論・結論）」「パラグラフ間の結束性」「序論と結論の呼応」である。評価の結果、レベル（L）1〜6 の内訳は表 11 のようになった。

表 11. MT 評価を行った 54 編の「構成・結束性」の評価点の内訳

L1	L2	L 3	L 4	L 5	L 6
4	6	26	14	3	1

「構成・結束性」を見るにあたっての要素としては、「メタ言語」や文章全体のマクロ構成や展開の仕方といった「構成の型」が考えられる。以下では、この 2 つについて質的に分析する。

4.1　メタ言語

メタ言語とは、「本文の内容とは直接関係のない、文章の展開を理解しやすくするような機能を持つ表現や説明のこと」（田中・阿部，2014）で、パラグラフの最初または最後によく使われる。形式面から見ると、「まず」「以上のように」等、語・句レベルのものと、「次に〜について説明する」「以上、3 つの観点から検討した」等、文レベルのものがある。また、機能面から見ると、「次に〜について述べる」のような「予告のメタ言語」と、「以上、〜について述べた」のように、締めくくりの役割を果たし、それまで書かれていたことを読み手に思い出させる機能を持つ「まとめのメタ言語」がある（田中・阿部，2014）。

このような機能から、「メタ言語」の使用はパラグラフ間の結束性に関係すると考えられる。FC では、L3〜L5 の評価ポイントに「パラグラフ間の結束性」が関係しており、パラグラフ間の結束性が認められなければ L3、「パラグラフ間の結束性がある程度以上認められる」場合は L4、「パラグラフ間の結束性が高い」場合は L5 となっている。以下では、L3〜L5 の各レベルにおけるメタ言語の使用について見ていく。

L3 の多くは、ファーストフードから家庭料理（またはその逆）に話が転換するところでメタ言語が使われず、メタ言語があっても誤用であったりする。また、予告/まとめのメタ言語はほぼ使われず、まとめ部分では「それで」や「最後に」を誤って使っているものもあった。GAT19 を見ると、序論はなく、最初のパラグラフでファーストフードについて述べ、そこから第 2 パラグラフの家庭料理に話が転換するところでメタ言語は使用されておらず、結束性が低い。また、結論部で「それから」を使用しているが、「したがって」のような帰結を表す接続詞のほうが適切だと思われる。このように、パラグラフの冒頭で、適切なメタ言語が使われないと、エッセイ全体の論理展開に関わり、読みにくくなる。

構成・結束性が L3 のエッセイ（全文）

【GAT19：3（3, 3, 3）】

ファストフードを食べて見るであろうか。もちろん、人々の多くはこの実門に「はい」と答える。時間があまりない時や、A から B まで速く行かなくては行けない時、ファストフードを食べることはとても簡単で便利なことである。ファストフードについて考えたら、最初マックや KFC などに作られた食べ物だと考える。しかし、あれは体に悪い。でも、あの食べ物ばっかりファストフードというものであるか。ファストフードは英語で「速い食べ物」という意味で、道や駅内やスパーで買ったおにぎりやすしもファストフードである。

うちで自分か家族と作った食べ物は体に良くておいしい。それで、家族や友達と飲食するのはいい時である。でも、料理をするなら、長い時間が要りながら、友達や家族といっしょに料理をして話すのは楽しめる。食材を買いに行くのはときどき物価が高いで大変である。一方で、ゆっくり食事するのも体にいいである。

それから、マックや KFC で食事するのよりうちで食べることはいいである。時間にファストフードはいちばん速いが、速く食べることは胃に悪いから、たぶん調子は悪くなる。友達とうちでゆっくり食べて話すことは、一人でどこかでファストフードを食べるのより楽しいである。今度、ファストフードを食べなくては行けない時、体にいいおにぎりやお寿司など食べようか、うちで家族と友達と食べよう。

L4 では話が転換するパラグラフ冒頭に「一方」「それに対して」「しかし」等のメタ言語が使用されているものが多い。まとめのメタ言語は、「つまり」「だから」「以上書かれた通りに」等が一部に見られるが、予告のメタ言語の使用は 14 編中 2 例のみだった。

L5 は、数が 3 編しかないため、傾向として述べることはできないが、どれもパラグラフ初めにメタ言語が使用されている。また、まとめのメタ言語は、「最後に私は言いたいことは」「その全部を考えると」「最後に」等、予告のメタ言語は「最初にいい点について話してみましょう」「最後に私は言いたいことは」等が使われ、まとめのメタ言語、予告のメタ言語の使用割合が高くなっている。例えば、RRS27 のゴシックで示した箇所を見ると、次に来る内容を予告するメタ言語がパラグラフ冒頭に使用されており、構成が明示的に示されている。

構成・結束性が L5 のエッセイ（全文）

【RRS27：3（4, 5, 4）】

現在の世界にはさまざまな食べ物の種類があって、自分の国を出ないで海外の料理を食べられます。そしてファーストフードの店も次々できます。それに対して、今も自家製料理が大人気です。

仕事のせいで時間があまりなくて、仕方がないでファーストフードを食べる人もいますし、自分で作ってゆっくり食べる人もいます。どんな料理がおいしいのか、健康にいい影響を与えるのかとよく争います。それでは考えて見ましょう。

最初にいい点について話してみましょう。ファーストフードの場合、それは早くておいしいものを食べられることです。または、仕事の後自分で作る力がファーストフードの店にテイクアウェイできます。言いかえれば、店で注目して、持ち帰ってうちでゆっくり食べられることです。自家製料理の場合、それは入っている材料を全部知っていますので、体に良いか悪いか心配する必要はありません。そして好きな材料を選んで、好きな物が作られることもいい点です。

悪い点と言ったら、まずファーストフードにたくさんの保存料や化学調味料が入っていると言わ

れます。そのもののためファーストフードを食べれば食べるほどもっと食べたいとも考えられます。自家製料理の悪い点はもちろん時間がかかることです。ある料理を作るため一日がかかることもあります。そして、家族は大勢の人がいたら、皆が好きなものを作るのは簡単なことではありません。しかし、それはそんなに悪くありません。それをきっかけにして自分で作るのをやめないからでしょう。

最後に私は言いたいことはそれが私の意見なんですが自家製料理はもちろんファーストフードより何倍においしくて、体によくて、そして心地よいです。しかし、時々ファーストフード店に行っても、悪いことにならないと思います。

まとめると、(1) 下位レベル（L1、L2）は、パラグラフ意識もなく、結束性以前の問題である、(2) 中位レベル（L3）は、話が転換するパラグラフの冒頭で適切なメタ言語が使われていないことから、パラグラフ内の内容をまとめる意識が薄く、接続詞の使用は文と文のつながりのためで、パラグラフとパラグラフとのつながりを示すものはあまり見られない、(3) 上位レベル（L4、L5）になると、誤用も認められるものの、話の転換部にメタ言語が使われ、予告のメタ言語、まとめのメタ言語も認められてパラグラフ内の内容をまとめる意識が高くなる、ということが傾向として明らかになった。つまり、本調査からは、レベルが上がるにしたがって、パラグラフ意識が現れ、パラグラフの冒頭で適切なメタ言語が使われるようになり、それが結束性と関係しているということが分かった。

4.2　構成の「型」

本節では、構成の「型」について考察する。具体的には、「マクロ構成」（序論・本論・結論）、ファーストフードと家庭料理の「比較」の展開法、食生活についての「意見」の現れ方から構成の「型」を見る。

「構成・結束性」の L1～2 ではパラグラフ意識がないので、当然マクロ構成意識もない。マクロ構成意識は L3 あたりから認められるが、序論や結論のないものもある。L4 になると、マクロ構成が明確に認められる。したがって、本節での考察は L4 以上が対象である。

4.2.1　「比較」と「意見」

「比較・対照」モードの展開法としては、Block style（B-s）と Point-by-point style（P-s）（田中・阿部，2014）が典型的である。英語のパラグラフ・ライティングでは明示的に教えられている（Bailey & Powell，2008；田地野他，2010）。

実際、英語話者、中国語話者、日本語母語話者のエッセイには B-s は多く認められるが、P-s は英語話者を除いて少ない（田中，2016; 田中・久保田，2014）。ヨーロッパの学習者のエッセイにも B-s の型は認められたが（P-s らしきものはわずか）、「比較」の展開法として意識的に書かれたものではなく、「意見」に主眼が置かれているようである。中国語話者や日本語母語話者では、「意見」は、最後の「結論」部分に付加的に述べられるにすぎないことが多かったが、ヨーロッパの学習者では、序論、本論、結論全てに現れているものもある（GAT37）。つまり、意見を述べていく中で、比較が行われているのである。図 1、図 2 は、上記の型を示す。

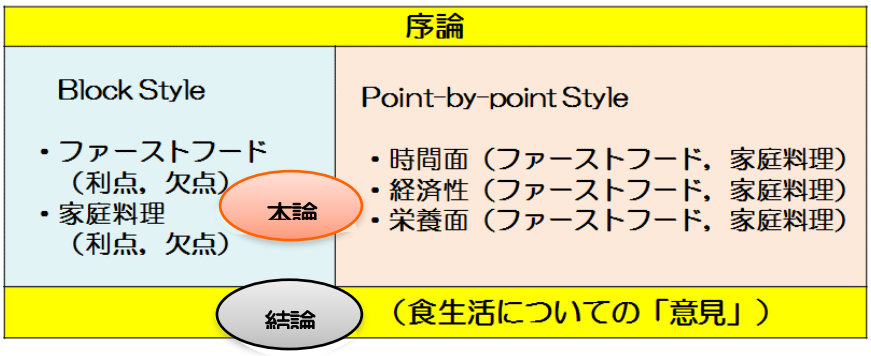

図 1　日本語母語話者・中国語話者のマクロ構成：「比較」中心

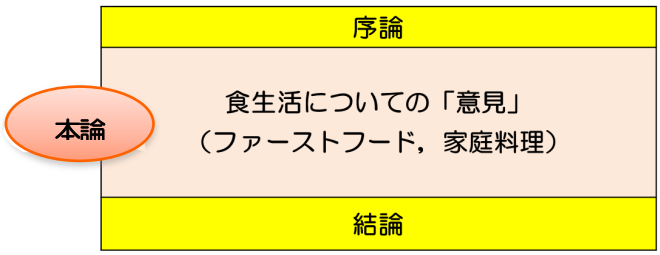

図 2　ヨーロッパの学習者のマクロ構成」：「意見」中心

さらに、ヨーロッパの学習者のエッセイには、論を展開していく際に、「呼びかけ」（例：「次に、～を見てみよう」）等の「予告のメタ言語」や「修辞疑問」（例：「～ではないだろうか」）が積極的に使われているものが認められる。GAT37 では、冒頭、3 行目と序論の最後に使われている。日本語母語話者では「呼びかけ」を行うことはなく、中国語話者ではエッセイの最終部での「呼びかけ」（母語の影響の可能性）を除くと、「呼びかけ」や「修辞疑問」はヨーロッパの学習者に比較すると少ない。

GAT37 では、パラグラフの冒頭が「呼びかけ」で始まり、パラグラフの最後に「修辞疑問」が投げかけられている。そして、それに続くパラグラフ（「もちろん」で始まるパラグラフ）で適切に応えられていて、効果的な論理的展開となっている（図 3 参照）。

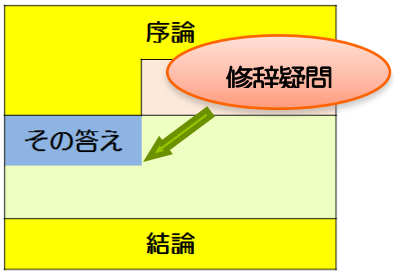

図 3　ヨーロッパの学習者の論理展開の例（修辞疑問）

だが、その次の「しかし」で始まるパラグラフにはうまく繋がっておらず、論理展開に支障を来し、読み手を混乱させる。したがって、パラグラフ間の結束性や論理展開を決める冒頭のメタ言語は重要だと言えよう。

ヨーロッパの学習者の例（呼びかけ、修辞疑問、意見、「メタ言語」）

【GAT37：4（4, 4, 4）】

ライフスタイルを表すもの「フード」

ファストフードを食べる理由は何ですか。「暇なときは家庭料理、忙しいときはファストフード」という理由を挙げる人が多い。なぜかこのファストフードはご飯を作る時間がない人にしか食べられていないという印象をつけるが、**ファストフード店をよく通っている人たちはみんなそうか？**私の意見ではファストに作ったものの与える感じは一言で「めちゃくちゃ」と言える。ファストフードは栄養が少なくて、よく食べると病気になりやすくなると批判する人が大勢いる。**それを分かっても食べる消費者がいるのはなぜだろうか。**

もちろん、家庭料理を作るのはずいぶん時間がかかるし、普段に作る量は多くて一人暮らしにとっては高いし、ファストフードを手に入れるのと比べれば料理をするのは難しいかも知れないが、一日に最低二回ゆっくりしながら、料理をするのも自分で体にいい材料を選べるのも健康的にいいものだ。

しかし、ファストフードの自分の国との全然違う味が気に入る点が人の心もとらえると思うけど、料理をせず、おいしいご飯をとれることの便利さとマスコミの広告が人にファストフードを食べさせるのが一番強い影響だと決まっている。…… 以下略

4.2.2 「構成・結束性」が L6 のエッセイ

最後に、「構成」が L6 のエッセイを紹介する。HHG51 は、「総合的評価」「目的・結束性」「日本語」が L5 で、今回分析した 54 編のヨーロッパのエッセイの中では最高点であった。

「構成・結束性」が L6 のエッセイ

【HHG51：5（5, 6, 5）】

食習慣・ファストフード店と内食

この頃、特に若者に、ファストフード店が人気があるそうである。利点がたくさんあるらしい。サービスが速く、値段も安く、おまけになんでも美味しい。**だが、お母さんが作ってくれた家庭料理はそうではないだろうか。ちなみに健康はどうなるだろうか。**

ファストフードは確かに美味しいが、体に悪いから気をつけた方がいい。ファストフードを多く食べると、太る可能性が高くなる。それはファストフード店でカロリーが高い食品ばかりが売られているからである。食品の味付けも美味くできており、量が普通少ないからハンバーガーを一個食べると、お腹がいっぱいにならない。したがって、食べ物をたくさん買い、結局たくさん払うことになってしまう。

それに対して家庭料理は全然違う。ファストフードに比べて調理時間は家庭料理の方が長くなる。それに家庭料理だから、自分で作らなくてはならない。**しかし、いくら手間がかかっても、健康的な食べ物は一番ではないだろうか。**ファストフードは何が入っているか分からない。**むしろ知らない方がいい。**だが、脂肪や不自然なものがたくさん入っているのは確かだ。

家庭料理なら栄養のバランスをよく考え材料を自分で選ぶ。量も多く、おかわりもできる。そして、お母さんやお祖母さんや恋人、つまり家族が作ってくれた料理は一番美味しいと思う。

二度とファストフード店に**行ってはいけないだ**と言わない。たまには行ってもいいと思う。だが、いつも自分の健康を考えて食べよう！

マクロ構成は、序論、B-s（ファーストフード・家庭料理）の本論、結論から成る。序論はファーストフードで始まり、序論の最後で「だが、お母さんが作ってくれた家庭料理はそうではないだろうか。ちなみに健康はどうなるだろうか」という修辞疑問や疑問文を投げかけている。そして、次のパラグラフで「ファストフードは確かに美味しいが、体に悪いから気をつけた方がいい。ファストフードを多く食べると…..」と適切に応えている。また、その次のパラグラフの冒頭では「それに対して」というメタ言語も適切に使われ、「家庭料理」に話が移っている。さらに、次の「しかし、いくら手間がかかっても、健康的な食べ物は一番ではないだろうか」という問いかけに対しては、「ファストフードは何が入っているか分からない。むしろ知らない方がいい。…..」と自問自答して完結させている。この「むしろ知らないほうがいい」のような、冷静あるいはやや冷ややかにも感じられる書き方にも余裕が感じられる。結論部の日本語に誤用（行ってはいけないだ）があるが、序論で述べた「健康」というテーマを繰り返しており、序論と結論の呼応が認められる。このように、good writing にマクロ構成と結束性は不可欠であり、メタ言語はその有効な手段の１つだと言えよう。

以上、MT 評価の「構成・結束性」のレベルに基づいて、メタ言語と構成の型について述べた。「構成・結束性」だけでなく、他のトレイトもあわせて結果を詳細に見ると、「日本語」より「構成・結束性」の方が高いものや、反対に、「日本語」より「構成・結束性」の方が低いものもあった。日本語力が高くても、「構成・結束性」が悪ければ読みにくくなり、逆に、日本語力が不十分でも、「構成・結束性」が高ければ読みやすいエッセイになる。教育現場では、構成意識を高め、適切にメタ言語が使えるように指導することが必要であろう。

（文責：田中真理・坪根由香里）

5　おわりに

以上、ヨーロッパ日本語学習者のエッセイを分析した結果について報告した。本パネルパート１の「日本語」では、レベル（成績群）別のエッセイの言語特徴を検討した。まず、量的特徴として、レベルが高くなるとエッセイ全体も一文も長くなり、語彙も豊かになることが分かった。また、レベルが高くなると、書き言葉に適した助詞の運用をしていることが確認された。特に上位群では修辞疑問の終助詞「か」が使われている例が見られた。さらに、レベルが上がると丁寧体より普通体が多く使用されることが分かった。助詞や文末表現の分析からレベルが上がると、レジスター意識が高まることが示唆された。ただし、こういった特徴がヨーロッパの学習者に限った特徴かどうかということまでは今回は検討できていない。今後の課題としたい。

その一方で、パート２「目的・内容」、パート３「構成・結束性」では、アジアの学習者とは異なる点が認められた。例えば、ヨーロッパの学習者は自分の「意見」を明確に持っていて、それがエッセイの根幹を成している。それは「構成」にも表れていて、筆者らがこれまで接してきたアジアの学習者のエッセイの型とは異なる。修辞疑問を使って論が展開されているものも認められる。ヨーロッパの学習者を十把一絡げに論ずることはできないし、おそらく「国」というよりも、それぞれの「機関」によってライティング教育事情、教育方法も異なるのだと思う。しかし、そういった点を勘案しても、上記の特徴にはヨー

ロッパの母語での口頭やライティングのレトリック教育や思考法が関係しているのではないかと推察される。さらには、「課題」重視か「意見」重視かといった評価との兼ね合い（パート 2）や大規模試験等への対策と関係する（田中，2016a）可能性もある。

独自の「意見」の展開と、アカデミック・ライティングの「型」とは矛盾した面を持つかもしれない。しかし、日本語が十分でない場合には「型」が読み手の理解の助けになることは事実であり、また、オリジナルな構成（展開）は、その書き手の背景のレトリックを知らない読み手には、「読みにくい」と評価されてしまうこともありうる（cf. 田中・長阪, 2009）。ましてや日本語が十分でない場合、読みにくいと捉えられる可能性は高くなる。

また、今回のエッセイは辞書を使用して書かれたのだが、メタ言語の間違い等には辞書の影響（母語と目標言語とのずれ）が出ている可能性も推察された。パネルでは、最後に全データ（611 編）でもっとも評価の高かったエッセイを示し、good writing の要因についても確認したが、紙幅の関係で、それについては稿を改めたい。

（文責：田中真理）

注.

[1] 本稿は、パネル発表の 3 つの発表、「ヨーロッパ日本語学習者のエッセイの日本語の言語特徴」（阿部新・佐々木藍子）、「「目的と内容」におけるマルチプルトレイト評価とホリスティック評価の関係性」（影山陽子）、「ヨーロッパ日本語学習者のエッセイの構成・結束性」（田中真理・坪根由香里）を 1 つの論文に集約したものである。

[2] 本稿で分析したエッセイには I-JAS の未公開データも含まれている。

[3] 200 字以下のエッセイは評価対象から除外した。

[4] 言語特徴量は長谷部陽一郎氏（同志社大学）の協力による算出である。

＜参考文献＞

Bailey, E. P., & Powell, P. A. (2008). *The Practical writer* (9th ed.). Boston, MA.: Wardsworth.

Tanaka M. & Kubota S., (2015, November) *Being a Good Writer in Japanese: Analysis of Japanese Academic Writing Organization from L1 and L2*. Paper presented at the 14th Symposium on Second Language Writing. Auckland, New Zealand.

迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子（2016）「NINJAL-多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』第 6 巻 3 号，pp.93-110.

竹内理・水本篤編著（2014）『外国語教育研究ハンドブック【改訂版】研究手法のより良い理解のために』松柏社.

田地野彰・ティム　スチュワート・ダビッド　ダブルスキー（2010）『Writing for Academic Purposes 英作文を卒業して英語論文を書く』ひつじ書房.

田中真理（2016a）「日本語教育の立場から L1，L2 双方向から考える日本語アカデミック・ライティング：「構成」面について」In K. Oi, B. Horne, M. Narita, Y. Itatsu, M. Abe, Y. Kobayashi & M. Tanaka (Eds.). *ESL Writing in East Asia: Practice, Perception and Perspectives,* 4.1. (pp.134-153). Shobi Printing Co. Ltd.

田中真理（2016b）「学習者のエッセイに表れた書き手の「読み手意識」」パネル発表 田中真理・迫田久美子・野田尚史（2016）「日本語学習者コーパスにおける対話―ロールプレイ，メール，エッセイの分析を通して―」『ヨーロッパ日本語教育 20　2015 ヨーロ

ッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』，pp.113-119. ヨーロッパ日本語教師会.
田中真理・阿部新（2014）『Good Writing へのパスポート―読み手と構成を意識した日本語ライティング』くろしお出版.
田中真理・久保田佐由利（2014）「アカデミック・ライティングの構成面について：L1, L2 双方向からの考察」*CAJLE 2014 Conference Proceedings,* pp.163-173.
田中真理・久保田佐由利（2016）「日本語アカデミック・ライティングに規範は必要ないか：「構成」面の分析に基づく提案」，*CAJLE 2016 Conference Proceedings*，pp.263-274.
田中真理・坪根由香里（2011）「第二言語としての日本語小論文における good writing 評価―そのプロセスと決定要因―」，『社会言語科学』14-1，pp.210-222.
田中真理・長阪朱美（2009）「ライティング評価の一致はなぜ難しいか―人間の介在するアセスメント」，『社会言語科学』12-1，pp.108-121.
坪根由香里・田中真理（2015）「第二言語としての日本語小論文評価における「いい内容」「いい構成」を探る―評価観の共通点・相違点から―」，『社会言語科学』18-1, pp.111-127.
マルチプルトレイト評価基準改定版（田中・長阪, 2006/2013）: <http://nihongo.nufs.ac.jp/teacher/39.html>（2016 年 11 月 7 日）.

【コーパス】
「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」（International Corpus of Japanese as a Second Language：I-JAS）.

＜謝辞＞
本研究は，科学研究費基盤研究（B）26284074「日本語ライティング評価の支援ツール開発：「人間」と「機械」による評価の統合的活用」（田中真理代表）及び同基盤研究（A）16H01934「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」（迫田久美子代表）の研究の一部である。